



中に、自分だけが清く正しく生きようとする事がどんなにむづかしい事でしょう。雪舟は逃れ逃れ、落ちぶれおちぶれて、ここまで来たと言っても、云い過ぎではありません。

絵を描いたら古今無双です。その上当代屈指の学僧です。天才であり努力家である雪舟が、周防、長門から豊前（大分）と放浪し九州の耶馬溪おく、中詰の里までたどりついたのです。思えば時代に合わない芸術家ほど哀れなものはありません。雪舟の平和の心、正しい心がそうさせたのです。

「宋元画（そうげんが）の値打ちは、墨一色で雄大な世界を書き現わす事だ」。この驚岩のように・・・とそう思いながら、あかず眺めている様子は、「宋元画」第一の画家ではなく、ただ一筋に美術に精進して悩み苦しんでいる一介の老僧の姿であります。

「わしの一生は雲水でいいのだ。わしは、わしの思い通りの省筆破墨の画法さえ、完成すればいいのだ。」と一人つぶやきながら、白水（しろみず）の亭へ帰って行きました。

いつものように、小さい阿弥陀を安置してある、机に向かって座りますと、長い間想を練りました。それから一点一劃（一点一画）でも、絶対にゆるがせにせず、精魂を傾けつくしている雪舟の筆先からは血がほとばしり出るような、鋭さがありました。

文明七年、雪舟が五十六才の時に、豊後の国大分の郊外上の原に居を構えて、天開図画楼と称したのであります。まもなくそこを立ち去り、長元年の六十八才までの大部分をこの白水の庵室で過ごしたのですから、はじめて静かな生活に入って画業に専念したのではないかと思います。そして夜は、自分で丹精を込めて作った築亭を眺めながら、好きな酒を飲んで、いい心持ちになりますと、尺八をろうろうと吹いて、その余韻を楽しんだのであります。（完）